

講演 (一)

神と人との第一義の接触と 第二義の接触について

講演者 滝沢克己

司会 本多正昭

私は以前「神と人との第一義の接触」、「第二義の接触」ということを書きました『仏教とキリスト教』、法蔵館一九六四年。

接触といいますが、何か神と人がバラバラにあつて、それからから接触するというように聞こえるのですけれど、そういう意味ではなくて、両者が触れているということ、そこにはいのちの交わりがあるわけです。神と人との第一義の接触とはどういう意味かといいますと、自己成立の根柢に神と人との無条件の接触があつて、この事実が、事柄の順序からしますと第一の原事実だ、ということですから神と人との接触といいますが、それは人間の心が清いとか、人間が何か偉大な業績をあげたとか、そういう人間の働きや形と全然次元の違うことでもあります。それは人間の働き以前に与えられている原事実ですから、そこには人間の言語的表現もありませんし、言語以前といつても、直覚というようなものもないですね。それからよく無意識ということはいいますが、

それも既に人間の働きの中に入ることですから、無意識ということも違います。

自己の成り立ちということですが、もちろん人間が人間を成り立たせたわけではありませんから、人間が成り立つということは人間から出たことではありません。それは歴史の中からも社会的諸条件からも出ないですね。人間であるということは、人間にはどうすることもできないことであります。人間が成り立つということは、人間の働きを超えたこと、それは人間世界あるいは歴史の内部のことではなく、人間の成り立ちの根柢にはそれは全く違ったことが既にあるわけで、人間はふつうの意味での理由も目的もなしにいきなり成り立つてくる。そこには既に人間を成り立たせるものがあるわけで、それには姿もなく、ふつうの意味での働きもない。人間が成り立つという、そこには、既に絶対に無限で無相で、ほんとうに自由自在、自らによって自らあるという、そういう

いのちそのもの、絶対無的主体があり、人間はそれによってしか成り立って来ないということなのです。人間の意志や働き、また世界内部の何かの働きというものは全然別な決定が、人間が成り立つてくるところにあるのですね。

それをまあ一言で言いますと、原決定とでもいうか、神と人との接点、限界点ですね。人間が成り立ってくるのと時間的には同時に人間は自分自身にかかわり、他の人とものかかわるといふ働きが出て来て、するとそのかかわり方が原決定からして審かれるということがあるのですね——真宗のほうではあまり審くというような言葉は使われないようですね、キリスト教では審かれるということがあります。

人間はこの原決定のもとでしか、意識的にせよ無意識的にせよ、自己決定ができない。原決定ということは、すべてのことがそのもとでしか起らないということ、そうすると自己決定も原決定のもとにしか起こってこないわけですから、人間が原決定を無視して働くと、自由に働いたつもりであっても、一番もとのことが抜けてしまいます。すると、どんなに働きが優れていても、どんなに業績をあげても、どんなに人が集っても、それは全部虚無の中に陥ってしまうことになると思うんですね。そういうわけで第一義の接触と言いましたのは、そういう意味での神と人との原関係のこと、人が決定したのではなく、その原決定において人が成り立つという決定、神と人との大限界点のことです。

人間が人間として成り立つと、人は他のものに対して、また自己に対してかかわって、働いて、姿をとる、そういうかかわり方は原決定の線に沿わないと駄目だということがありますから、そういう意味で、原決定と人間の自己決定の間には、絶対に逆にできない関係がある。そこで「絶対不可逆」ということを言うわけです。人間は成り立つてくると既にある姿をとるわけですね。そのときに、その自己が、原決定を離れて姿をとるということはないです。人間の自己は、姿をとることは事実ですけども、それは姿から姿へという無限の可能性の中からひとつが出て来るといふことですから、その意味では、人間の自己そのものもやはり形のないもので、無相で、実体ではない。ただし、自己が無相だといって、それは真実無相の、絶対無限の自己とは全然別でして、人間の自己はそれのおかげで、それに基づいて、永遠のいのちまた光を表現する、映し出すということです。創世記では人間は神の似姿だという(26)。ですから人間が存在するということとは、そういう意味で表現点として、原決定からして他のものない自己自身へのかかわり方の是非を問われうる表現点として、存在するわけです。

そうすると人間というものは決して特別の存在ではなくて、事実存在するという意味では物と同列のものですけれども、ただそこには主体化ということがあるんですね。素粒子的な段階、機械的な段階から有機的なものへとだんだん主体化が

進んで、その極限点までくると人間になる。デカルトは、人間は自由意志という点では神と変わらないものだと言いましたけれども、スピノザは、神と変わらないといってもやはり絶対に違う、両者は全然別なものだと言った。でそういうことは、私は第一義の接触ということで考えたことなのです。

そうすると神と人の第二義の接触とは何かといえますと、原決定というものはそれ自身働くものなんですね。原決定の主がその原決定を通して働くということがあります。だから人間の働きが起こってそこに無相の主体の働きがきていないということとは絶対にない。人間は原決定に沿って自己決定——無意識のものを含めてですね——するべく定められている。人間として生きるときに、まずそこが心にとめられていなければならない。そこが体の芯にまであらわれてこなくてはならないのですけれども、人間はふつう一番大事なことを考えもしなければ、そういう問題があることも考えない。人間のいのちの根元に原決定があり大限界があるということはずっかり忘れて、忘れているということすら全く思い出さないように忘れていきます。ところが、人間自身のことなんだけれども、人間の意志とは独立である。人間にきているんだけど人間の意志や働きとは全然違う、というものがあって、それを心にとめないと、人間の働きも生活もうまくいかないということがあります。だから人間は何を支えとして立ち、どこに向かって生きているのかという問いがはじめからかけ

られていて、それを全然意識しなくてもそうなのです。それだけではなくて、それに対して答えを出しているわけです。いわゆる行住坐臥、あらゆる立居振舞い、考えたり読んだり書いたりしているときに、そのいちいちの姿が既にその問いへの答えになっているわけです。赤ン坊がお母さんを求めるというようなときにも常にそれがあつたわけです。一番根本的な点についての答え方は、人間の個人の生活にも共同体の生活にも出て来るわけで、だからどんな未開な民族であつても、宗教が中心であるということは、そういうことだと思つてわけです。そしてまあ、中世までは、とにかく人間の世界の中に、原決定から成り立ってきたひとつの中心があつて、みんながそれを中心としそれをめぐって日常の生活を展開するというふうになっていましたけれど、そして近代に入つて、近代は人間の自覚の時代だといわれますけれど、それはほんとうの自覚にはなっていない。たとえば人間尊重とか人間の権利とか言いますが、そういうものが結局何に基づいているかということは殆んど誰も考えない。民主的ということにしてもそうです。決して自明ではないわけです。近代に入つてそれまでになかった素晴らしい物質文明が生まれましたけれど、結局それは人間を支えるに足りないということは、今日いろんな形ではっきりしてきているのです。

私が神と人との第二義の接触と言いますのは、結局、自分自身が成り立つ底にどういうことがあるかということ、どう

いうことが生きて働いているかということに目が覚めるといふことです。実はそこにははじめからあったのに、そういうことは全く思いもかけなかったと、しかしそこに目覚めたら、世界も自分も歴史も違ってみえてきた、というふうに目が開くということがあります。そういうことになりますと、それは、原決定に呼応し照応した自己決定が人間に起こったといふことになるわけですね。そういうふうに、原決定に照応し合致するような人間の姿、姿勢というものが起こってくる、それを第二義の接触というふうに呼んだわけでありますと。ですから第二義の接触ということは、自己成立の根柢に目覚めるといふことです。それから、根柢の方が第一義で、目覚めの方は第二で、そこに逆にできない関係があると言ふのです(不可逆)。原決定、ないし原決定の主体の、原決定を通しての働きですね、それは人間が悟っているかないか、信じているかないか、目覚めているかないか、そういうことに全然関係がない。しかし目が覚めていなくてはその働きが現実的でないといふようなことがあって、といつても原決定の働きははじめから全く現実的なので、目が覚めたときにそれが変わるといふことではなく、変わるのとはこっちの方ですね。原決定への応え方が変わるわけです。ですから第二義の接触とは、第一義の原決定の働きに照応するような自己決定が起こったといふことです。

経済学の方では、人間の働きとは全く独立な制約があるこ

とを、マルクスが発見しましたけれど、そういうふうにはすね、人間の働きとは全然独立なことがあって、それを心にとめないといふ、大変なことになるといふことは、宗教だけではなく、他の領域にもあるわけです。ただ経済学までまきますと、経済というものは人間がやっていることですから、そこを掴むことは難かしい。しかしそういうことがないと経済学といふものは成り立たないわけですね。

第二義の接触といいますと、それは自己成立の根柢にある原決定、神と人との大限界、原決定の主体である神に対する直接の関係の事柄です。その意味では人間生活の全体を覆うことではない。自己成立の根柢、つまり人間の主体化の根源の事柄に直接かかわるといふことだけが人間の生活ではありません。しかし人間は有限なもので、他のものがないと生きられないから、他のものに対する働きかけがあるわけですね。すると人間の、物へのかかわり、また人がそれを通して他の人にかかわるといふ領域の事柄、自然科学や経済学の領域の事柄にも、人間の意識や働きとは全然別で全く独立だといふことがあって、それを心にとめないといけない。この点では、自然科学的経済学的現象と、宗教現象とは変わらない。だから、第二義の接触というとき、それを人間生活の正しいあり方の事柄という広い意味にとりますと、それはやはり物質面での生活にまで及んでくるわけです。間接的に、人間の意志から独立なもの人間とのかかわり一般を含む事柄です。

原決定の主体は私の働きとは全然次元の違う絶対無相の主体ですから、他のものも私の勝手にはならないので、私の存在から全く独立に存在するわけで、それ自身の関係性があるわけですね。そして無相の主には有限の主体である人間が正しく反応すると、その無相の主体において定められた原決定、神と人との大限界の中でそれに照応しつつ生きることになるわけです。

そうするとそこには、神への直接のかかわりと、他の物や人にかかわることを通して神にかかわるといふ、間接的なかかわり方がある。ですから、自己成立の根柢への目覚めといふとき、それは原決定の主への直接のかかわりといふ意味では、第二義の接触といふことはひじように限られた意味で言うわけです。

以上のようなことは私が考え出したことではありませんで、ルカ福音書の中に放蕩息子の譬えがあります。放蕩息子が父親から貰った財産を持って家を出ていつつまらないことに金を使い果たした。だけれどもそれで父親とのつながりが揺ぐとか消えるとかいふことはいけません。子供はそれをすっかり忘れていたけれども、財産を蕩尽したあげくにそれに気が付いて父のもとに帰ってくる。ですから迷ったからといってそれで原関係、原決定が揺らぐとか消えるとかいふことはいわけて、そのことが放蕩息子の譬えにはつきり出ています。

それから私がこういうことを考えたのは、やはり最初に西田先生の言われる絶対矛盾の自己同一ということ、自己成立の根柢にこういうことがあるんだとわかって、それからバルト先生に学んで、西田哲学では充分はつきりしていなかった、大変なことがあることに気が付いたので。いまになって考えてみますと、イエスを見つめると、そういうことが実ははつきりわかつてくると思うんです。イエスは神さまをお父さんと呼んでいる。人間イエスの神に対するそういう関係は、イエスが神さまをお父さんと呼んだからできたわけではない。人間イエスが成り立ってくるところに既に親子に譬えるほかにないような敵しくそして親しい関係がある。神と人との接点即限界点ですね。イエスはそこに徹頭徹尾生きられた。その接点即限界点から浮き上るといふことはなかった。イエスはそこに生まれてそこに生きてそこで死んでいかれた。そうするとイエスの生涯は、人間イエスの成り立ちのところにはじめから来ている原決定に忠実に生きた、それに呼応して生きたということですから、イエスはそれを証した。その原決定はもちろんイエスだけではなくて、パリサイ人にも異邦人にも全部来ているわけで、それなしに人間が事実存在することはない。ただ誰もそれに気付かなかった。ユダヤ人は、まわりの民族と違って、無相の主体との目に見えないつながりが人間の生きているもどかというのをどこかで考えていながら、そこから出て来た律法の形にとらわれていて、形の方

をもとより重んじたものだから、形を破つてもとを証ししたイエスを殺してしまつた。しかしイエスの言動の全体は、原決定に対する人間の自己決定の正確さという事に尽きる。ですからイエスは第二義の接触の完全な形態、したがつて裏から見れば、原決定の主が人間の姿をとつて、人間のためにあらわれたと、こう言うよりほかに方だということです。

つまり人間イエスが証ししたことは、人間の自己決定は、そこに神の原決定の働きがあることを少しもゆるめないまま、あくまでも人間の自己決定だということです。論理的に矛盾するようですが、人間の自己決定は絶対的な被決定なのです。絶対的、無条件、単純な原決定を人間の側からいうと、絶対的被決定ということになるわけで、ですから人間の能動性というものは、絶対的に決定された有限のものが自己決定をするということで、原決定の内部、その支配のもとでの主体化であるわけです。

すると人間の働きには、被決定という面が前に出てくる場合と、そうではなくて自己決定という面が前に出てくる場合と両方あるんですね。身心の関係というのはそういうことだと思ふのです。それから心の面で感覚するということは、これは心の働きですから自己決定の面が前面に出てくるんですけれども、しかしそれは事実存在として成り立っている人間がほかのものに関係するということですから、見るとか聞くとかいうことでも、いわゆる直接に起こっていることではな

いですね。これは人間が成り立つ根柢にある原決定を通して起こっていることです。他方の極には思考というものがある。それは無限のものですけれど、無限といっても、決定された有限のものが無限をとらえるということですから、被決定性がなかつたら思考といつても足場がなくなるわけですね。

バルト先生の言葉に「精神としての身体、身体としての精神」というのがありますけれど、ですから精神が先だとも、また体が元だとも言える面があります。しかしそれは相対的なことであつて、人間における身心の関係、感覚と理性の関係というようなのは、人間がその成り立ちの底で絶対無条件に決定された存在、しかも自由に自己決定をするべく定められた存在であるということを基にして成り立つてくることです。といつても何かが自分のうしろにいて自分を操るといふことではありませんで、人間の自由は原決定に基づいて成り立つということです。

真宗に弥陀の本願ということがありますが、これは原決定にあたります。人間がいて本願がかけられていないということはない、人間はそれに気付いていないし無視もしているけれども本願の外に出ている人間なんていない。これは親鸞もこう考へていると思ひます。で、そこに目が開けるといふことがあつて、それを信心決定といふふうに呼びますけれど、これが第二義の接触になるわけです。弥陀の本願は第二義の接触ではなく、第一義の原決定であつて、いくら人が迷つて

いるときでもこれはちゃんとおあるんです。

以上のようなことで、大体第一義と第二義の接触について

どういうことを考えてきたかお話ししたと思います。

講演(一)に関する討論

司会 本多正昭

司会 滝沢先生のお話に関する討論は、講演二のあとで、ただいまの講演に関するものをも含めて、行いたいと思います。ただいまは、どうしてもこの点だけは確かめておきたいということについて、簡単に質疑をお願いいたします。

西村恵信 先生のおっしゃる第一義の接触と第二義の接触ということを、伝統的な禅の言葉にあてはめると、それはいわゆる本覚と始覚の区別にあたるのでしょうか。

滝沢 そうなると思います。私よく禅の言葉を知りませんけれど、そうだろうと思います。

武田竜精 信心決定というとき、それは弥陀の本願の光明が実際に来ているという、そこから起こるのですか。本願に気が付くということは何によって起こるのか。第二義の接触が第一義の接触から起こるなら、前者は後者に含まれることになり、すると区別する理由がない。

滝沢 第二義の接触は第一義の接触に基づいて起こるわけで

すが、両者の間は切れている。第二義の接触とは、第一義の接触に目覚めること、その無条件性がわかるといふだけのことです。

武田 第二義の接触の場合、人間の自己決定が原決定に呼応するということにおっしゃいましたが、呼応するかしないかはどこで判定するのですか。

滝沢 それは原決定を視座にしてそこからいえることです。といっても何か比べるといふようなことではなくて、呼応するしないは人間の側の事柄ですが、信心が正しいかどうか、正しいという証拠を握ろうとか、そういう必要がないということがわかることなんです。